

## 要約

本研究では、大学を消極的な理由から留年をした者を対象として、なぜ留年をしたか、なぜ出席できなくなったかを焦点とし、大学生活の様相も踏まえて不適應の要因について検討にした。

留年者に対しての先行研究は多々行われており、大学に対する意欲低下やアルバイト・サークル等学外の活動を重視する生活、就職浪人や留学等による意図的な留年といった様々な要因に目を向けられている。しかし、いずれも統計的データかつ、一要因に目を向けており、留年者個人に焦点を置いた研究はされていない。そこで本研究では、留年者個人に焦点を当てることにより、各々の大学不適應要因の解明と不適應のタイプ化を行った。

調査対象は留年者12名で、一人ずつインタビューを行った。結果、個人の不適應要因が明らかになった。大学に対する意欲低下やアルバイト等の課外活動重視生活、深夜の交友やパチンコ等のギャンブルからの生活スタイル崩壊等が挙げられた。また、大学生活を細かい時期に分け、その時期の生活や心境を聞くことにより、不適應のタイプを改善期の違いから5タイプに分類することができた。

1. 完全回復タイプ：不適應後、改善期を迎えるにあたり、授業に対しサボりや遅刻を一切せず、毎日毎回出席する状態まで改善したタイプ。
2. 漸次的改善傾向タイプ：はじめから長期にかけての改善を目指し、少しずつながら確実に授業に出席するタイプ。
3. 不適應・改善反復タイプ：卒業を目指し、急激に改善しようとするが、継続されずに再度不適應に陥るタイプ。その後、再度卒業を目指し再び改善する
4. 改善有り退学タイプ：卒業を目指し、急激に改善、改善しようとするが、継続されずに再度不適應に陥るタイプ。その後、卒業を諦め、改善しない。
5. 改善無し退学タイプ：不適應に陥ったまま、改善をしないタイプ。

このように、大学留年者一人ひとりに焦点を充て、比較することにより、不適應の特徴やその背景を明らかにした。